

知識探訪

多民族社会の横顔を読む 協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

クランタンの思い出

坪内良博（京都大学名誉教授、甲南女子大学名誉教授）

初めてクランタンを訪ねたのは 1965 年のことです。クダ州のアロールジャングスと呼ばれる地域で農村定着調査を終えて、他の州の様子を少しばかり見ようと、アロールスターを発って、コタバル空港に到着しました。赤っぽいクダの土を見てきた目には、白く輝くクランタンの砂地は、別世界のように感じられました。

当時のアロールスターには、隣室との境の壁の上部が金網で張られたようなホテルしかなかったけれども、コタバルには、浴室付きの部屋を備えたホテルが二つもありました。夜になるとホテルの屋上では、耳を聳するばかりの音楽とともに、ビールなどが供されていました。ホテルの近くの市場の主役は女性で、そこは活気に満ち溢れていました。車を雇って、英国の人類学者ファース夫妻が調査した海岸部へ行くと、漁から帰ってきた小舟を、砂浜に引き上げる作業が、男女入り混じって進行していました。

1970 年から、クランタン州パシルマス郡で農村調査をすることになりました。最も長くは 1970 年から 71 年にかけての 1 年余、その後 2000 年まで 1、2 カ月程度の滞在を何度か繰り返しました。小さな家を手に入して調査集落の中に住むことも考えたのですが、結局、電気と水と便所を確保するためにパシルマスの周辺から自動車で通う体制になりました。調査費の半分を割いて買ったトヨタ 1000 は、時には、定員をはるかに上回る同乗者とともに、クランタン全域を駆け巡ることになりました。クランタンにはまだ日本車は普及しておらず、ガソリンスタンドの華人のメカニックが、マニュアルを見ながら整備をしてくれました。

調査地として選んだのは、クランタン川中流域の天水田とゴムタッピングを生業としてきた集落ですが、タバコ耕作が導入されると奥地の開拓などで外へ出ていた人々が戻り、やがてシンガポールへの出稼ぎが人々の生活を支えるようになりました。家屋も、アタップ葺き、編み竹壁の高床形式が減り、シンガポールから学んだブロック造り平土間形式が取り入れられてきました。モスクの外観も目を見張るほど良くなりました。

パシルマスで借りた家の近くにも、調査集落の南端にも、イスラムの寄宿学校であるポンドックがあって、人々の宗教生活のよりどころになっていました。学校教育の普及とともに、ポンドックに学ぶ若者が減って、代わりに、そこで余生を過ごそうとする高齢者が増加していて、クランタンから弱小ポンドックが消失する日も遠くないと思われました。宗教教師（トググル）は、故人の法事に呼ばれたり、田畑の鼠除けの護符をつくったり、信仰にかかわる説教をしたりして人々から尊敬され、日本の寺院の住職よりももっと強く住民の生活に溶け込んではいけるけれども、コーランを開いてもそれを読むことさえ困難な住民が多かったのです。



ある農民の家族。女性が髪を隠すようになったのは10年後のこと。1970年頃パシルマス郡にて（筆者撮影）

クランタンが、日常生活に至るまでイスラム色を強めたのは、私の予想を超えていました。私は、その頃、世界中で世俗化が進むという「近代化」の定式を信じていたのです。イスラムの強化は、断食月の監視体制や、女性の服装など、外部から見るところで目立ちだし、コタバルでは豚肉を使った中国料理も賞味できなくなりました。最初のパシルマス滞在から 10 年も経ってからのことでした。1970 年頃、クランタン州庶民の強いイスラム志向は、彼らのマレー人としての誇りが、政治にシンボリックに表れた姿に過ぎないと考えていました。イスラムは、その後、クランタンの人々の内面にも、これまでになかった変化をひき起こしたのでしょうか。

< 筆者紹介 >

1938 年京都府に生まれる。京都大学文学部卒業。同大学院文学研究科博士課程修了。京都大学文学博士。1982 年に京都大学教授、1993 年より京都大学東南アジア研究センター所長、1998 年大学院アジア・アフリカ地域研究研究科へ移籍、研究科長を経て定年退職。甲南女子大学教授、文学部長を経て、同大学学長。2011 年退職。京都大学名誉教授、甲南女子大学名誉教授。著書に『マレー農村の 20 年』（京都大学学術出版会、1996 年）『小人口世界の民族誌』（京都大学学術出版会、1998 年）『東南アジア多民族社会の形成』（京都大学学術出版会、2009 年）『バンコク 1883 年 水の都から陸の都市へ』（京都大学学術出版会、2011 年）他。